

保育者を対象とした これからの研修の在り方について

中尾 繁史

(2022年3月7日受理)

Prospects for Training for Childcare Workers

Shigenori NAKAO

要旨：保育者を対象とした研修は、2020年初頭からの社会状況の変化に伴いオンラインで実施される機会が増加している。本研究では、保育者を対象とした様々な研修事例や先行研究から、今後の研修の在り方について検討した。これからの研修の在り方として、①オンラインでの研修実施を前提として内容が構成されていること、②研修参加者の様々なニーズに応えるための充実したコンテンツがあること、③複数回の連続した研修として構成されていること、の3要素が求められるようになって考えられる。

Key words：オンライン研修

1. はじめに

2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、幼児教育・保育現場でも従来とは全く異なる状況への対応が必須となった。感染拡大の状況下では、従来型の対面による研修実施も困難となり、研修の中止や延期、オンラインへの切り替えなどの対応がなされた。一方で、当該感染症は、社会の変革をもたらしたとも言えるだろう。本当に必要な接触以外は様々な代替手段でどうにかなること、その代替手段にも様々なメリットがあることに気づかされるなど、パラダイムシフトとなった。現在では社会全体でオンラインでの会議や研修会を迎合する流れが加速しているように感じられる。実際に、従来は研修会場での研修参加が多かった保育現場でもオンラインでの研修が増加している。本稿では、保育者を対象とした参集型の研修やオンライン研修を実践している事例や先行研究から、今後の保育者支援や現職者研修のあり方を検討したい。

2. オンラインで研修を実施している先行研究

“オンライン研修”をキーワードとして論文検索を

行くと、2020年以降は一定数の報告がある。以下に先行研究のいくつかを概観する。

星ら¹⁾は、Web会議システムとソーシャル・ネットワークワーキング・サービス（SNS）を活用してオンライン研修会を開催し、研修効果があったことを報告している。また、オンライン研修のメリットとして、研修に参加しやすいことや資料の事前配布など理解を促進する環境がとりやすいこと、デメリットとして、講師が参加者の様子を把握しにくいなど研修体制に一定程度の工夫が必要であることを指摘している。この研究では資料配布にSNSを活用するなど、研修参加者の増加や理解促進につながる工夫をしている点が興味深い。

虫明ら²⁾もWeb会議システムを活用して実施した情報交換会から、オンライン研修への発展可能性を示した。この報告では、リアルタイムに講師と参加者が集うことでよりインタラクティブな研修が可能である点、心理的な距離を縮めることができる点をメリットとしている。また、従来の参集型の研修には必要であった移動や宿泊にかかるコストが不要となるため、オンラインでの研修が一般的になれば選

択肢が広がることも指摘している。研修にかかる様々なコストの低減も、今後は必須のキーワードとなることは想像に難くない。

大西³⁾は、2020年度の学校教員向けの研修が対面からオンラインに移行した際の参加者アンケートから、オンライン研修と対面研修の成果について報告している。「オンラインのほうが成果が上がる」「(オンライン・対面の)どちらも研修成果は変わらない」という評価が合わせて6割以上でありオンライン研修を好意的に見ている割合が高かった。しかし絶対的にオンライン研修がよいと考えている訳ではなく、オンラインにも対面にもよい点があり、この研究での研修会参加者はオンライン研修ならではの利点を見つけてアンケートに記述している様子もあるとしている。併せて対面研修とオンライン研修両方の良さを活かした研修の計画が必要であると述べている。

永野ら⁴⁾は、保育者を対象としたオンライン研修について、その研修効果をアンケート調査から検討している。調査結果から、研修の有効性を示す「学習の効果」は理解度、満足度の高さから一定の効果があることが明らかとなった。一方で、参加者側にも「機器や設備」、「PC等の操作スキル」、「受講環境」、「通信環境」、「研修参加の意欲」など個別に取り除かなければならない課題が存在することを指摘している。

いずれの研究も、オンライン研修の可能性や利点に言及するとともに、その限界点や課題についても指摘している。上記研究から、オンライン研修には、参加しやすいこと、内容によっては理解促進につながるなど、等々様々なメリットがあること、一方で講師や参加者との相互作用を担保するためには一定の工夫が必要であることが分かる。また、保育者の学びの機会を最大限に確保するためにも、オンラインでの研修の展開が必要であることも明らかであろう。上記の永野らは、保育者を対象としたオンライン研修の意義を以下の3点にまとめている。

第1に「保育者の学びを止めないことで、保育の質と専門性の向上に資する」ことである。教育界でも盛んに叫ばれている、「教育を止めない」は大切な

テーマであり、「保育の質を担保する」ための「研修を止めない」ことを保育施設でも実践する。

第2に「保育施設の研修の多様化への挑戦」である。対面でなければ学びの機会が無いと考えるのではなく、今できること、対面以外の研修のあり方を模索し、より良い研修のあり方を提案することは、研修の受け手である保育者自身の自己研鑽の意欲(モチベーションの維持)向上や自己成長につながる、同時に保育界の保育の専門性の向上を目指す上での社会的使命であると考えている。

第3に「オンラインを利用した他施設の保育者とのコミュニケーションの機会を創出する」ことである。対面での研修は他施設の保育者との貴重なコミュニケーションの場でもある。互いに切磋琢磨すること、かつ、他の保育施設の利点を取り入れ保育実践に活かすことは重要な視点であり、この貴重な体験をオンライン研修で実践できないかと考えている。

永野らの指摘からも、参集型の研修が担っていた“他施設の保育者との貴重なコミュニケーションの機会”をいかにしてオンラインでも実現するかが、今後の研修の在り方を考える上で重要なポイントとなるだろう。

3. 保育者を対象とした研修内容の潮流

ここまで、オンライン研修の流れを概観してきたが、保育者がどのようなニーズを持っておりどのような内容の研修を必要としているのかについて先行研究を概観する。

星野ら⁵⁾は2016年度より継続して4年間、保育者に対して「日々の教育・保育の現場の中で困っていること」と「研修などで学んでみたいこと」について、共通の17項目から当てはまる項目を選択するアンケート調査を実施している。“困っていること”の上位項目は4年間の調査で共通しており、最も多かったのが「行動が気になる子への支援のあり方について」であり、突出して高く82%前後、次いで「障害を持つ子どもについて」が45%前後、「保護者との関わり方について」が43%前後であった。

以上から、特別な配慮や支援が必要な項目について多くの保育者が一定の困難さを持っていることがわかる。

さらに、“研修で学びたいこと”の上位項目も「行動が気になる子への支援のあり方について」が78%前後、「障害を持つ子どもについて」が53%前後であった。3番目に選択されたのが「子どもの発達について」(40%前後)であり、上位2項目は困っていることと研修で知りたいことが共通しており、こうした傾向は全国的なものだと筆者は感じている。

保育者が日々感じる“困っていること”や“研修で学びたいこと”は、所属する保育機関での役割によって変化しうる。担当するクラスの子どもたちの発達段階に応じた対応が必要であることは明らかであるが、上述の「気になる子」や「障害を持つ子ども」の発達の様相はより個人差が大きく、保育者がよりよい対応方法を知りたいという想いを抱くことに何ら疑問はない。このようなニーズに答えながらも、日々の保育の展開に資する研修内容が必要であろう。

西野ら⁶⁾は、保育の質の向上のために必要な要素を保育者へのアンケート調査から検討している。「保育の質」の向上のために必要と思われることについて、自由記述回答を分析した結果から、保育者は、保育者自身の能動的な学びの姿勢などの内面的要素だけでなく、保育環境や人的環境、園内外での学びの機会など対外的要素とその間の相互作用が保育の質を高める上で重要な要素であると捉えていると報告している。同報告の中で、得られた知識や意見を自分の中に留めず、他の保育者と共有することや語り合うことの重要性についても指摘しており、得られた知識を共有するプロセスに質を高めるカギがあることがわかる。

齊藤ら⁷⁾は、保育者としての専門性を高く意識する中堅後期の保育者3名を対象として、フォーカス・グループ・インタビューを実施し分析を行っている。その結果、3名の保育者の専門性の捉え方は、それぞれの保育者により異なる“専門性観”があることが明らかになった。保育者の学び方はそれぞれが異なり、多様であること、保育者個々の課題をつなぎ

合わせる保育者間での情報共有による学びがあることも指摘している。

この2件の先行研究に共通するのは、保育者間での情報共有がさらなる学びにつながる点を指摘していることである。情報共有の方法は職場内の物理的環境や人間関係に左右され制約があるかもしれないが、保育者個人の質の向上と保育施設全体での質の向上は、両輪として考える必要があることは間違いないだろう。

保育者間での情報共有は、いわゆる同僚（同一施設内で働く職員）との情報共有と、同業者との情報共有の、2通りの状況が想定される。前者は園内研修が想定され、後者は園外研修が想定される。園外研修における保育者の学びについて報告している安藤ら⁸⁾は、園外研修として実施した保育実践検討が、保育者にとってどのような学びとなるのかを、半構造化インタビューから分析している。その結果、園外研修として保育実践を共有することで、保育者の思考が「どのようにするか」から「なぜそのようにするか」に視点が変化したことを報告している。こうした園外研修は、自分の所属する保育機関とは異なる保育展開を知る機会となり、自分の保育内容について考えるきっかけとなることが「なぜそのようにするか」と理由を考察することにつながることとなる。

職務にある程度慣れると、その仕事内容について立ち止まって振り返ることが少なくなるが、園外研修のような他施設の状況を知る機会が、自身の仕事内容について再考するきっかけとなることは明白である。この点は今後の研修の在り方を検討する際には考慮されるべきだろう。

実際に、片岡ら⁹⁾は、園内研修と、各園の代表者が集まった園外研修との間で、往還型にデザインされた保育者の現職教育・研修の在り方を検討している。研修参加者はアクションリサーチの手法を用いて各園で課題探究に取り組み、その取組を園外研修で共有した。これらの探究型研修によって、研修参加者の役割の自覚が高まること、自身の成長の手応えへと結びつくことが示された。この報告の興味深い点として、研修参加者以外の各園の保育者を巻き

込む過程を含んだ研修内容を設定したことが挙げられる。これによって研修参加者の資質向上はもちろん、その他の保育者や園長にも行動変容の機会をもたらしており、今後の研修の在り方について重要な視点であると考えられる。

4. これからの研修の在り方

新型コロナウイルス感染症により、参集型の研修を代替するかたちでオンラインでの研修が実施されてきた。同様の状況がある程度継続するという状況ならば、今後もオンライン研修という方法は一定のニーズがあることは明らかなだろう。これからの研修の在り方としては、オンライン研修であっても、参集型の研修と同じような研修効果が得られるように研修講師側が研修をデザインすることは必須となる。そのため、本稿ではこれからの研修の在り方をオンライン研修を前提として考察する。

オンライン研修について報告している先行研究から、オンライン研修に参加することに対して「機器や設備」、「PC等の操作スキル」、「受講環境」、「通信環境」、「研修参加の意欲」などの課題があることが報告されている。操作スキルについては時間経過や習熟により課題の解消が期待できるが、機器設備や受講/通信環境については個人での対応が難しいことが予想される。所属する保育機関での対応が望めない場合の具体的方策は別途考える必要があるだろう。また、参加者の意欲については、研修対象者をキャリアに応じて細分化することなどで、参加したいと思える研修内容に合致しやすいテーマ設定が可能かもしれない。

次に、研修内容について考察する。星野らの報告のように、「気になる子」や「障害を持つ子ども」に対応するための知識・技能は今後も一定のニーズがあると考えられる。この種のテーマの研修講師は筆者も多く担当してきているが、保育者のこうしたニーズが減少している印象はない。ニーズとして長らく存在しつづけており、もはや保育者が持つ普遍的なテーマとも言える。その理由としては、「気になる子」や「障害を持つ子ども」は、集団と個人を比較した際にその本質的な課題が顕在化する。保育

施設という環境がある種の集団生活である以上、集団から逸脱する子がいなくなることはない。こうした子どもたちにはそれぞれ発達状況や家庭環境、利用できる物的・人的資源が異なっており、ケースバイケースである。また、そうした子どもたちに対応するための知識・技能が日々進化するなかで共通項を見出すことが難しいという側面もあるだろう。この点においては、対応するためのハウツー的な知識を入り口として、より本質的な理解のための知識を得ることや保育観の醸成が必要である。具体的方策としては、三宅ら¹⁰⁾が報告している、継続的な園内研修が有効であると考えられる。この研究では、発達支援をテーマとした研修を継続的に実施している保育機関と、新規の継続研修参加となった保育機関の保育者を対象として研修前後の質問紙から研修効果について検証している。その結果、新規参加の保育機関の受講者には、子ども理解に対する意識変化の芽生えが確認され、継続研修4年目の保育機関では、環境調整によって一人ひとりの子どもの育ちを支えようとする園内体制が構築されつつあることが確認されたと報告している。同じ研修講師によって継続的に研修を実施することに一定の効果があることが推測できる。新しい知識を得ることも必要だが、中長期的視点での保育者自身の意識変化に着目することは非常に重要な観点であろう。

保育者自身の意識変化という点では、保育者間での情報共有の有効性を最大化することがより効率的な専門性向上につながると考えられる。上述のように、保育者個人の質の向上と保育施設全体での質の向上は、両輪として考える必要があり、先行研究で示されたように同業者との情報共有や交流が有用であることは明らかなだが、オンラインで実現するには環境構築や課題設定などに工夫すべき点がある。この点は検討がはじまったばかりであるともいえ、今後さまざまな実践がなされることに期待したい。

これまで論じてきた内容を整理すると、以下が今後の研修のあり方として求められる要件であると考えられる。

- ① オンラインでの研修実施を前提として内容が構成されていること。

- ② 研修参加者のニーズを満たせるよう、様々なテーマから選択できること。
- ③ 複数回の連続した研修で構成され、その取り組みを園内外でも共有することを前提とした往還型の研修であること。

これらはそれぞれの要素を単独で実現することは難しくないが、全てを高い次元で実現することは容易ではない。特にオンラインでの研修実施と園内外での情報共有を両立することが困難である。先行研究ではリアルタイムの情報共有について言及しているが、リアルタイムという条件は難易度が高い。研修参加の容易さとリアルタイムでの情報共有はトレードオフの関係にある。そこで、学習管理システム（Learning Management System：LMS）を活用した研修体制の構築を提案する。LMSは学習内容を系統的に整理でき、その取組状況なども理解しやすく、複数回の研修を構築する上で適している。また、LMSを軸として情報共有する仕組みを構築することで、園内外での情報共有も可能となるだろう。今後の研究課題として、LMSを活用した研修体制の構築を推進していきたい。

名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究, 36, p117-134. (2021)

- 9) 片岡元子, 松井剛太, 松本博雄, 高橋千代, 保育者の行動変容を促す「探究型研修」の検討－研修をデザインする側の視点から－, 保育学研究, 58(2-3), p233-244. (2020)
- 10) 三宅浩子, 久保田真規子, 多様性の尊重とインクルーシブ保育－継続的な園内研修が保育者に与える影響－, 宮崎学園短期大学紀要, 13, p109-117. (2021)

引用文献

- 1) 星紫織, 堀内寿志, 橋本賢勇, 松尾龍志, 池田光泰, 荻原真二, Webシステムを利用したオンライン研修会の試み, 医学検査, 70(1), p.123-127. (2021)
- 2) 虫明昌一, 高橋ユカ, 十河浩史, Web会議システムを利用したオンライン研修会の可能性と課題－コロナ禍での医療系事務職員の取組みを通じた検討－, 川崎医療福祉学会誌, 31(1), p.269-276. (2021)
- 3) 大西孝志, 新型コロナウイルス感染症対策を踏まえた研修会の実施オンライン研修会について, 東北福祉大学教育・教職センター特別支援教育研究年報, 13, p11-23. (2021)
- 4) 永野典詞, 香崎智郁代, 保育施設におけるオンライン研修の有効性に関する研究, Visio, 51, p29-37. (2021)
- 5) 星野真由美, 栗山宣夫, 保育者の「困り感」と「研修内容の要望」調査の分析－4年間の継続調査から－, 育英大学研究紀要, 3, p15-32. (2021)
- 6) 西野経子, 阿部好恵, 「保育の質」の向上のために必要な要素に関する研究－保育者へのアンケート調査から－, 帯広大谷短期大学紀要, 57, p35-42. (2020)
- 7) 齊藤勇紀, 守巧, 保育者が捉える保育の専門性に関する研究－同一園の保育者に対するフォーカス・グループ・インタビューからの検討－, 新潟青陵学会誌, 13(2), p14-27. (2020)
- 8) 安藤香, 大宮摂子, 川合真由美, 佐藤朋絵, 那須とよみ, 羽根由美子, 園外研修における保育者の学びに関する研究,